**説教20231022フィリピ4：4-14マタイ22：1-14「キリストの喜び」**

**今日は、キリストの教会にお越し下さりありがとうございます。心より歓迎いたします。さて、皆さんこの別府不老町教会の礼拝に招かれるにあたっては、どなたか友人知人から声を掛けられて、来られた方も居られることでしょう。**

**そして、友人知人たちと一緒に、今日のこの集会に参加するということに喜びや意義を見出す方も居られるかも知れません。**

**でも、キリストの教会と言うところは、そう言った人間の繋がりを超えた、神さまイエス様とのつながりを確信できるところです。或いはまだ確信できない方々には、イエス様と自分とのつながりにあこがれる処になるかもしれません。**

**私たちは、この世にあって神様を知らないならば、人の愛に頼って生きていくしかないでしょう。人の愛と言うのは残念ながら移ろいやすいです。例えば男女の愛にしても、その愛が燃えている時は、二人は幸せにいられますが、もしその愛の炎が消えてしまったら、幸せではなくなるでしょう。**

**それに比べて、イエスキリストの愛は永遠です。キリストの愛は、燃え尽きない芝の様に永遠に消えることがありません。それは人の力や思いを超えた神の神秘がそこに在るからです。**

**この教会にあって、あなたがキリストの愛に包まれれば、最早、この世の義理人情と言った枠組みを離れることが出来ます。皆さん今、悩んでおられることがあると思います。身近なところでは、家族関係、そして広く見渡せば、イスラエル、ガザ、ウクライナ、ロシアでの戦争と、いたるところで、神さまを悲しませる出来事が人間によって繰り広げられています。そこに、人間の愛や義理人情がない訳ではありません。しかし、それで、悩みが終わるわけではないし、戦争が終わるわけではないのです。**

**私たちはこんな苦しい時代だからこそ、キリストの愛から出発しなければなりません。キリストの愛は、人間の愛を強めてくれます。男女の愛を強めてくれます。人間の正義を整え、憐みに満ちたものに変えてくれます。人の情けを、人への執着から解放して、本来の清々しい姿へと変えて下さいます。**

**それではそのキリストの愛を、私たちが知るにはどうしたらよいのでしょうか。それは、この聖書を読んで、聖書に親しむことです。聖書はその一字一句が、イエス様から私たちに届けられる愛の言葉です。イエス様の愛の言葉が、この一冊にまとめておさめられている訳ですが、この聖書の厚みが薄いと思うか、分厚いと思うのかは、人それぞれだと思います。仏教の経典などに比べれば、遥かに薄いですし、巷のハウツー本に比べれば分厚いという訳です。もし、この聖書が、私には分厚すぎると、今、思われる方は、是非、主要聖句を抜き出した薄いダイジェスト版聖書もありますので、そちらを通読してみてください。**

**又、このように牧師による説教を聞くことも、聖書からイエス様の愛を知ることのきっかけや、助けになります。教会に毎週来れないという方でも、思いついたときに日曜日の十時半に、この教会の礼拝に参加すれば、その日に聞かれる聖書の言葉から、キリストの愛を知るきっかけが得られることでしょう。今日のこの歓迎礼拝に限らず、是非、普段の日曜日に、イエス様から招かれて、教会へとお越し下さることを、心よりお待ちしております。**

**今日の聖書箇所を読んで参りましょう。新約聖書42ページ、マタイによる福音書２２章1節からになります。「イエスは、また、たとえを用いて語られた。『天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている。**

**今日、イエス様は私たちの為に、婚宴の話をして下さいます。婚宴と言いますのは、今日的な言葉で言い換えれば、結婚披露宴ということになるでしょう。それで、イエス様は結婚披露宴の話をして、何かを喩えようとしていられるのです。それは天の国のことであります。**

**天の国と言うのは、天国とも言いますし又、神の国とも言い換えられます。キリスト教徒でなくても、普段の会話で、私は死んだら天国に行きたいわ、などど普通に会話なさっていると思いますが、その天国、天の国と言うところが、聖書が語っている、キリストの愛が成就する処、完成する処であります。**

**私たち人間は、この地上を、今、歩んでいますが、今から真剣に、この地上を去った後、天国に行かれるように備えておく必要があります。もちろんそれは、天国にあこがれるという思いに重なることでありますし、又いくら、自分自身がこの地上で頑張って、善い行いをし続けたとしても、必ずしも、天の国に入れるわけではありません。なぜなら、私たちがこの地上を去って、天の国に入ること出来るということは、人間の思いや技をはるかに超えた、神さまイエス様の思いや技であるからです。私たちは自分自身の頑張りではなくて、イエス様の愛に満たされて、イエス様に自らを委ねて、イエス様に従順に従ってこの地上を一歩一歩歩むことによって、遂には、イエス様に引き寄せられて、天の国に招き入れられるのです。**

**近頃は、この世の中から祝福の時間が失われてきている様です。その様は、この世での結婚披露宴の移り変わりを思い浮かべれば、鮮明になることでしょう。**

**今から30年前の昭和の時代には、親類縁者、友人知人を沢山招いて、結婚式は教会で、そしてその後に、結婚披露宴をホテルの会場で催すというスタイルがもてはやされ、多くのカップルがそんな風に結婚式を挙げて、夫婦になる事にあこがれました。**

**私事で恐縮ですが、私も、かつてそんなスタイルの結婚披露宴に何回か招かれ、出席した事があります。結婚披露宴と言うのは誠に喜ばしい、結婚と言う祝福の場でありますから、その場に居合わせて、私も大いに祝福された記憶があります。ただその祝福は、時が経つにつれ弱まって来て、今や、ほとんどその時のことを思い出せないという披露宴もあります。**

**そして、私自身は、今に至るまで花婿という立場で結婚披露宴に臨んだことがありません。今では、この結婚するチャンスがなかったということ自体も、神さまからの祝福であるのだなあとも思わせられます。**

**最近は、ジミ婚ということで、このジミ婚と言う言葉も最早古いのかも知れませんが、二人だけの結婚披露宴、或いは、豪華なアルバム作成、或いは、ただ婚姻届けを役所に届けるだけ、と言うスタイルもあるようです。こういったいわゆるジミ婚と言うのが、推奨されて行われるようになるとは30年前には中々想像できなかったことでしょう。**

**でもよく考えてみますと、大勢の人を招くということは、それだけ祝福が多くなりはしますが、同時に気苦労や気疲れも多くなるに違いありません。ですからこの結婚披露宴の在り方の移り変わりも、理由がない訳ではなかったのでしょう。**

**この様に、この世における結婚披露宴の在り方は、移り変わって参ります。今日の聖書箇所にも、この地上における婚宴の移り変わりがイエス様によってリアルに語られています。ちょっと時代が古いので、人が殺されると言った出来事に違和感を覚えられる方も居られるかも知れません。しかし、イエス様の生きた時代には、結婚に際して、血で血を洗う戦いがあったことは紛れもない事実なのです。例えば、日本の戦国時代には武士の間で、政略結婚が行われ、それが勢力争いという血生臭い事象と直結していたことは、皆さんテレビドラマなどで周知の事実だと思います。**

**王は人々を次の様に招きました。「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。」**

**でも人々は集まりませんでした。その様子はちょっと今の時代に似ているでしょうか。とにかく、その時、人々はその婚宴に行くのが嫌だったのでした。又、極端な人は、伝令に来た家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまったのでした。**

**こんな成り行きがありましたので、次に王はやり方を変えたのでした。王は次の様に人々を招きました。『婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。**

**だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』**

**「町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。』と言うのもちょっと極端なような気もしますが、時代によってこんなことになる時代がやってくるかもしれませんね。**

**それで、町の大通りのそこらへんにいた雑多な人たちが次々と其の婚宴に招かれて、会場はいっぱいになったのでした。それで、案の定と言いますか、婚礼の礼服を着ていない者が一人いたのです。それでこの王はこの人に対して『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言ったのです。そしてこの者が黙っていると、王は側近の者たちに言いました。『この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』その後、王は言いました。「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」**

**皆さま、この聖書箇所を聴いて、ずいぶんと厳しいことをなさる王様だなあと思われることでしょう。でも、この王様と言うのは実は慈しみ深い天に居られる父なる神のことを喩えているのです。わかり易く言えば、父なる神は私たち人間に対して、まことの愛に根ざした、戒めをお与えになったということでしょう。**

**さて、今日のマタイ福音書のイエス様のお話は、たとえ話であります。今迄に、婚宴が天の国を喩え、この王様が、私たちの父なる神を喩えているということをお伝えしましたが、ではこの世の結婚は一体、何を喩えているのでしょうか。それは私たち一人ひとりがそれぞれ、天の国で、愛するイエス様と一体となるということです。イエス様を自分のうちにお迎えして、いつもそして最後までイエス様と共に歩んで行くということです。それは具体的には、教会で、私はイエス様を自分の救い主と信じてついていきます。と告白して、洗礼を受けるということです。私たちはそのようにして、この地上で、生まれ変わって歩み始めることによって、天国へと続く道を、漠然とした憧れではなくて、確かな道として一歩一歩歩み始めることが出来るのです。**

**天の国での婚宴は終わることなく変わることなく永遠に続くものですが、そこでは、人々はキリストの花嫁として、永遠の祝福に預かることが出来るのです。**

**私たちが、この世の婚宴で礼服を着て参列しなかったという罪を、父なる神は戒められ、私たちを正しく祝福された道へとその都度連れ戻して下さいます。そして、罪を悔い改めきれない私たち人間のありさまを父なる神は深く憐れんで、自らの愛する一人子イエスキリストを、私たち人間の身代わりに、十字架に付けられました。それから死に打ち克ったイエス様はよみがえられて、私たちの最愛の花婿として、永遠の祝福に入る道として、今ここに居られます。私たちを生まれ変わらせて下さる、そのキリストに感謝しキリストをほめたたえて参りましょう。**

**祈り**

**父なる神**

**この世にて悩み多き私たちを**

**どうか、この世の争いごと、憎しみ、妬みあいを、取り去って下さい。**

**喜びの源である、御子イエスに私たちが眼差しを向けて、常にイエスと共に歩めるものにして下さい**

**私たちのこの地上での日常の日々を常にあなたの恵みで満たして下さい。**